

平成 28 年度

# 「学生による授業評価」の概要

平成 29 年 6 月

県立広島大学総合教育センター

## はじめに

学生による授業評価アンケートを実施するようになって10年以上が経ちました。平成17年度と18年度は1回ずつ、平成19年度からは前・後期の期末に実施する形が定着しました。質問については、結果の信頼性と有効性を保ちつつ経年比較が行いやすいよう、また学生の負担にならないようにとの配慮のもと、高等教育推進部門で検討と改善を重ね、項目数を絞り込んできました。当該授業開講期間中に学生の声に耳を傾け、速やかに授業改善を図ることを目的として、学期途中に主体的に中間アンケートを実施するよう、授業担当者に依頼しています。大学教育再生加速プログラムの採択後は、授業外学修時間の目安をアンケート用紙に記して、自主学修を行ったかどうか、学生自身が振り返りながら回答できるように変更を加え、アクティブ・ラーニングの要素が一定の割合で盛り込まれているかをたずねる項目を追加しましたが、それ以外はほとんど変更していません。

今回の結果を「総合的な満足度」の数値で単純に比べると、最初に調査を実施した平成17年度後期は80.7%であったものが、平成21年度後期には91.3%と90%を超え、以後90%以上の高い値を示して今日に至っています。今年度は前年度より若干低かったものの、前期が90.1%、後期は92.2%でした。今回の結果で注目すべきは、共通教育における主体的な授業外学修時間の増加でした。平成25年度以降、意識的に組織的な教育改革に取り組み、「対話と体験を重視」する共通教育改革を平成27年度から導入した成果の表れと言えるでしょう。実施率の高さと担当者による振り返りコメントの記入率の高さも、授業に取り組む真摯な姿勢の表れであり、誇るべきことです。

無論、課題もあります。専門教育においては、カリキュラム改革と授業改善に積極的に取り組んだ学科で授業外学修時間が増えた一方、あまり変化が見られない学科も見受けられます。改善の参考となる自由記述欄に記入する時間を確保するようお願いしていますが、記入は必ずしも多くはありません。アンケート結果の丁寧な分析と、分析結果に基づく改善に向けた組織的な取り組みが必要なことは言うまでもありません。

現在使用しているアンケート用紙には、「個々の授業改善および大学の組織的な教育力の向上を図る目的で実施する」と記しています。28年度末までに、すべての学科でカリキュラムの構造と学修の段階を示すカリキュラムマップとナンバリングの作成を終えました。目指す人材の育成には、どのような教育をどのような方法で行うのか、どのようにすればより高い学修成果が得られるのか。この先は組織で取り組む力が問われることになるでしょう。個々の授業改善はもとより、教育課程表の区分ごとに組織単位で、授業改善、教育の質的改善に取り組むことが何より重要です。

さいわい、授業公開も進んできました。大学教育再生加速プログラムで養成を目指している教育改革の実践者FDerを中心に、ルーブリック評価の導入に向けた研修も進んでいます。学修成果の可視化を目指した取り組みも始まりました。総合教育センターでは、数字だけではない、学び続ける姿勢と力の獲得、受講者の成長を読み取ることができる授業評価アンケートを目指して、不断の改革を続けたいと考えています。

総合教育センター長 西本 寮子

# I 調査の目的と方法

## 1. 調査の目的と意義

授業はだれのためのものか。学生のためのものである。ラーニングが強調されるまでもなく、ティーチ (teach) からラーン(learn)へ、主体の明確化が進んでいる。学生に充実した教育を提供することは大学の重要な責務であり、その教育の根幹を為す授業が学生たちにどのように受け取られたか、学生たちの不満や喜びの「声」に傾聴することは有用である。もちろん、学生の評価を鵜呑みにせず、さまざまな工夫を凝らして授業改善に当たる担当教員側の冷静な自己評価が伴ってのことではあるが。

「学生による授業改善のためのアンケート」調査の目的は、授業を受けた学生に、その授業についての率直な意見を求めることを通して、授業担当教員並びに大学が授業の実施状況を点検・評価し、その改善に資するための基礎資料を得るために実施するものである。

この調査開始以来一貫して注視している具体的目的は、以下に掲げるとおりである。

- ① 教員が自らの授業改善のための資料を得る。
- ② 学生の学修姿勢を知るための資料とする。
- ③ 学生の授業への期待のありかを知るための資料を得る。
- ④ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑤ 学部・学科の授業時間割、及びカリキュラムの有効性を検討するための資料を得る。
- ⑥ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

このうち、本年度においては、単位制に基づき成績評価を認定する制度を利用している点を再認識し、キャップ (CAP) 制による履修登録単位数の上限設定を設けていることから、教室内の学修だけでなく、教室外での事前事後の自主的な学修を前提としていることを検証するため、②の学生の学修姿勢の具体的状況を把握する調査項目を昨年度に引き続き設けた。学生の主体的な学修時間の自己評価を時間幅によって問う内容である。

加えて、人材育成目標に掲げる「主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え」(一部抜粋)、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを育成するという視点から、ディスカッションやグループワークのような能動的学修機会の提供に関する調査項目を引き続き設けた。

調査内容及び実施方法は今後も見直しを続け、検証を踏まえたうえでより良いものにしていく必要がある。

そして、各教員レベルにおける授業改善、具体的には教材の選定から始まり、授業の内容が分かり易く説明されたか否かといった点や、難易度や進み具合、補助教材の効果等、さらに学生の発表や課題に対する対応・実習における支援、全体を通した満足度までを数値化し

て、検証に繋げなければならない。まさしく、教育の根本である学生第一の姿勢を効果的に実現できたか、個々の取り組みを学部や学科等の組織にまで広げて捉え、総体的な連携や継続的な改善に繋がっているかを見直し、教育の質向上を図ることである。その点では、専任教員のみならず、少なからず非常勤講師の教員からもコメントを提出していただき、全学を挙げて授業評価に対する意見や授業改善案を相互に検証する真摯な姿勢が示されている。

「授業改善のためのアンケート」に基づく組織的改善のための IR<sup>1</sup>を担当している部署においては、現状と課題を検証するために、教員個々の集計結果や学生の自由記述にも目を通さざるを得ない。守秘義務については言うまでもないことであるが、個々のデータはあくまで組織的改善のための指標の1つとして取り扱っている点を強調しておく。

## 2. 調査の実施概要

### (1) 実施期間

前期：平成 28 年 7 月 11 日～8 月 4 日

後期：平成 29 年 1 月 17 日～2 月 6 日

早期終了科目，集中講義科目については，担当教員が最終日に近い日程を設定した。

### (2) 対象科目

県立広島大学における平成 28 年度前期及び後期開講の全授業科目とした。ただし、「学外実習科目」，「卒業論文」については除外した。また，受講者数が 5 名未満の授業科目については，担当教員の判断で対象科目から除外することができることとした。

### (3) 調査項目

平成 28 年度の質問項目は，大きな枠組みはこれまでを活かし，(A) 学生自身についての 2 項目，(B) 授業と教員について 7 項目，担当教員による追加項目 3 項目，(C) 自由記述とし，3 区分で構成した。回答は 4 段階評価方式（例えば，強く思う=4，そう思う=3，そう思わない=2，全くそう思わない=1）とし，無記名とした。調査用紙は 8 頁参照。

平成 27 年度より，(A) 学生自身についての 2 項目のうち，2「わたしはこの授業に関連する授業外学修を行った。」という表現を，具体的な時間幅に基づいて状況を把握できるように，「問：わたしがこの授業に関連して行った授業外学修（課題，準備，復習等）時間（1 週間の平均）」とし，当該科目が 2 単位であれば，「4 時間以上」，「2 時間以上 4 時間未満」，「2 時間未満」，「全くしていない」から 1 つを選択させる方式に変更した。これは，大学設置基準に謳う「一単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することとし」（第 21 条の 2）の考え方に基づくものである。

<sup>1</sup> IR(Institutional Research)とは，大学運営や教育改革の効果を検証するための評価指標として，さまざまな情報を収集・管理し，教育・研究，学生支援，経営に活用することを意味している。

同時に、(B) 授業と教員についての項目には、全学的に推進しているアクティブ・ラーニングを検証する視点から、3「この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。」4「この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。」を設けた。そのほかの項目は、文言の微修正を加えただけで、調査項目の継続性を重視した。

また、アンケートの実施に当たり、授業の形態に合わせて担当教員により質問項目を追加できる点を積極的に活用するよう促した。

#### (4) 学生への依頼

調査方法等を全学生に通知し、学生の協力を得るため、本学 HP に実施概要を掲載して別途ポスター(9頁参照)を掲示した。新生生に対しては本調査が初回となるため、各キャンパス学年はじめのオリエンテーションで協力依頼文を配付した(10頁参照)。

#### (5) 配付及び回収方法

調査の実施に当たっては授業担当教員が調査用紙を配付し、その回収と教学課への提出は若干名の学生を指名し依頼した。配付後は学生が教員の目を気にせずに回答できる雰囲気醸成するため、教員は速やかに退出することとした。

#### (6) 実施状況

平成28年度県立広島大学の在学生数は、2,479名であった。調査の実施状況は、表1-1、1-2の通りであった。履修登録者数は、指定期間に登録完了の数値である。その後変更手続きをした者、学期の途中で授業を放棄した者等は減じていない。

表 1-1 平成28年度「学生による授業評価」(前期)

科目群	科目数	履修者数
全学共通教育科目	206	7,119
専門科目	391	17,226
教職科目	15	259
全学	612	24,604

■対象科目数(延べ)	612
■実施率	94.0%
■未実施科目数	37

表 1-2 平成 28 年度「学生による授業評価」(後期)

科目群	科目数	履修者数
全学共通教育科目	142	5,656
専門科目	426	17,377
教職科目	23	368
全学	591	23,401

■対象科目数(延べ)	591
■実施率	93.4%
■未実施科目数	39

なお、実施上の諸作業のうち調査用紙の印刷、授業科目担当教員別調査用紙の袋詰め、各キャンパスへの納品、単純集計作業(学部・学科単位の集計を含む。)は外部委託した。また、授業科目のデータベース作成、並びに調査の実施手続き、回収作業等の一部については、各キャンパス教学課の協力を得た。

#### (7)「授業改善のための中間アンケート」

##### ① 実施促進週間

前期：平成 28 年 5 月 23 日～ 6 月 3 日

後期：平成 28 年 11 月 8 日～11 月 17 日

「授業改善のための中間アンケート」(11 頁参照)は授業の中間時点で実施し、後半の授業改善の手がかりとすることを目的としている。セメスターごとに促進週間を設け、HP に掲載するなどして、学生及び教員に周知した。

##### ② 実施方法等

- 調査用紙は総合教育センターがメール送信する電子ファイルを印刷し、なるべく「中間調査実施促進期間」中に実施する。
- 中間調査の集約は原則として担当教員が行うこととする。具体的改善に結びつく特定項目や自由記述に限定したものでもかまわない。
- オムニバス等、授業形態により中間調査の実施が困難な科目については、中間調査用紙で各自が実施し、期末調査結果と比較することで改善のヒントが得られる場合もあるので柔軟に対応する。
- 「追加質問」については、担当教員が独自に項目を設定することができる。
- 配付と回収は担当教員が行い、結果は当該教員だけが見ることとする。また、このことを、授業担当教員(中間アンケートを実施する教員)はあらかじめ受講者に通知しておく。

##### ③ 受講生へのフィードバック

担当教員は、実施後の早い時期に可能な範囲で、結果の説明と主な意見に対するフィードバックを行う。また、報告書のコメントには、中間調査（もしくはそれと同等の手がかり）を踏まえた改善のポイント、結果（変化）と今後の課題などを反映させる。

### 3. 調査結果の集計とフィードバック

#### (1) 提供データ（集計表等）

担当教員には、調査を実施した各授業科目に対して、次の2種類のデータをフィードバックした。集計表には、当該科目のグループ集計単位、すなわち全学共通教育科目、教職科目、専門教育科目の別を明記した。

- ① 科目名、担当者名、開講キャンパス名、科目グループ（学部、学科等）、履修登録者数、回答者数、回答率等が記載された集計結果内容は次の通り。
  - ・設問別評価集計、・設問グループ別（学生の自己評価、授業評価）平均、・評価中央値レーダーチャート、・設問別評価構成グラフ、・中央値グラフ、・設問別平均の範囲と中央値)

#### ② 学生による自由記述一覧

設問4「この授業の教材（教科書・プリントなど）・教具（黒板、視聴覚・情報機器など）は適切だ。」と設問6「この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得た。」については「判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。」と記し、(C)自由記述では「授業に関する具体的な気づきや、改善すべき点、この授業で印象に残った点などについて、あなた独自の視点で、担当教員へのメッセージを記入してください。ただし、教員個人に対する誹謗中傷など、この調査の目的から逸脱した記述はしないでください。」とした。

学部代表の高等教育推進部門会議委員には、学部もしくは学科別に集計した専門科目の集計結果を、全学共通教育部門長には全学共通教育科目及び教職に関する科目の集計結果を送付した。

#### (2) 総括担当科目コメント及び総括コメントの作成

高等教育推進部門会議において、人間文化学部国際文化学科、同健康科学科、経営情報学部、生命環境学部、保健福祉学部における専門科目、全学共通教育科目、教職に関する科目の集計単位ごとに作成することと決定した。科目別教員コメントは、一昨年度より次の3つの視点より記述している。

- 1) 昨年度の結果を踏まえた授業改善点
- 2) 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点
- 3) 期末アンケート結果から見た今後の課題

なお、当該授業科目担当者および学部・学科等の総括コメントは各学部の高等教育推進部門会議委員、全学共通教育科目については全学共通教育部門長が、教職に関する科目については教職委員会委員長がとりまとめと総括コメントを担当した。全学集計に関する概要は総合教育センターが担当した。非常勤講師に対しては担当科目の集計表等を送付し、コメントの作成も可能な限り協力を依頼した。



## Ⅱ 集計単位別結果と総評

### 全学集計

#### 1. 分析の概要

##### (1) 分析の対象

全学集計の分析に当たっては、全授業科目を、全学共通教育科目、専門科目、教職科目の3群に分けた。また、表2に示した延べ回答数（前期：21,129，後期：20,073）を科目群別の分析対象とした。クロス集計の統計的検定法は、カイ二乗検定を用いた。

表2 回答数の内訳

科目群	回答数	
	前期	後期
全学共通教育科目	6,442	4,850
専門科目	14,466	14,919
教職科目	221	304
全学	21,129	20,073

##### (2) 基本的分析

基本的データとして、項目別の回答数、最小値、最大値、平均値及び標準偏差を科目群ごとに算出し、本節の末尾（26頁～29頁参照、表9-1～表11-2）に示した。

##### (3) 項目間の関連

質問項目別の回答間に関連性があるか否かを検討するため、全学共通教育科目、専門科目、教職科目別に各質問項目でピアソンの相関係数を算出し、無相関の検定を行った。

#### 2. 結果と考察

##### (1) 学生の自己評価

はじめに学生の受講態度の一端を検討してみる。表3-1、3-2、図1に科目群別に受講生の授業態度（問.「わたしはこの授業に集中し、真摯に取り組んだ。」）の自己評価結果を示した。学生の授業態度は良好で、おおむね授業に積極的に参加していることがうかがえる。

まじめに授業に取り組んだとみなす自己評価（「強くそう思う」と「そう思う」の合計）は全学（全授業科目）では前期（94.2%）後期（95.4%）とも90%以上に達していた。

表 3-1 受講生の授業態度(前期)

科目群	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう 思わない	全学(人)
全学共通教育科目	38.8%	55.0%	5.4%	0.9%	6,422
専門科目	35.8%	58.5%	5.1%	0.6%	14,413
教職科目	41.4%	56.8%	1.8%	0.0%	220
全学	36.8%	57.4%	5.1%	0.7%	21,055

p<0.001

表 3-2 受講生の授業態度(後期)

科目群	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう 思わない	全学(人)
全学共通教育科目	36.4%	58.1%	4.7%	0.7%	4,819
専門科目	40.7%	55.0%	3.8%	0.6%	14,888
教職科目	33.9%	60.5%	4.6%	1.0%	304
全学	39.5%	55.8%	4.0%	0.6%	20,011

p<0.001

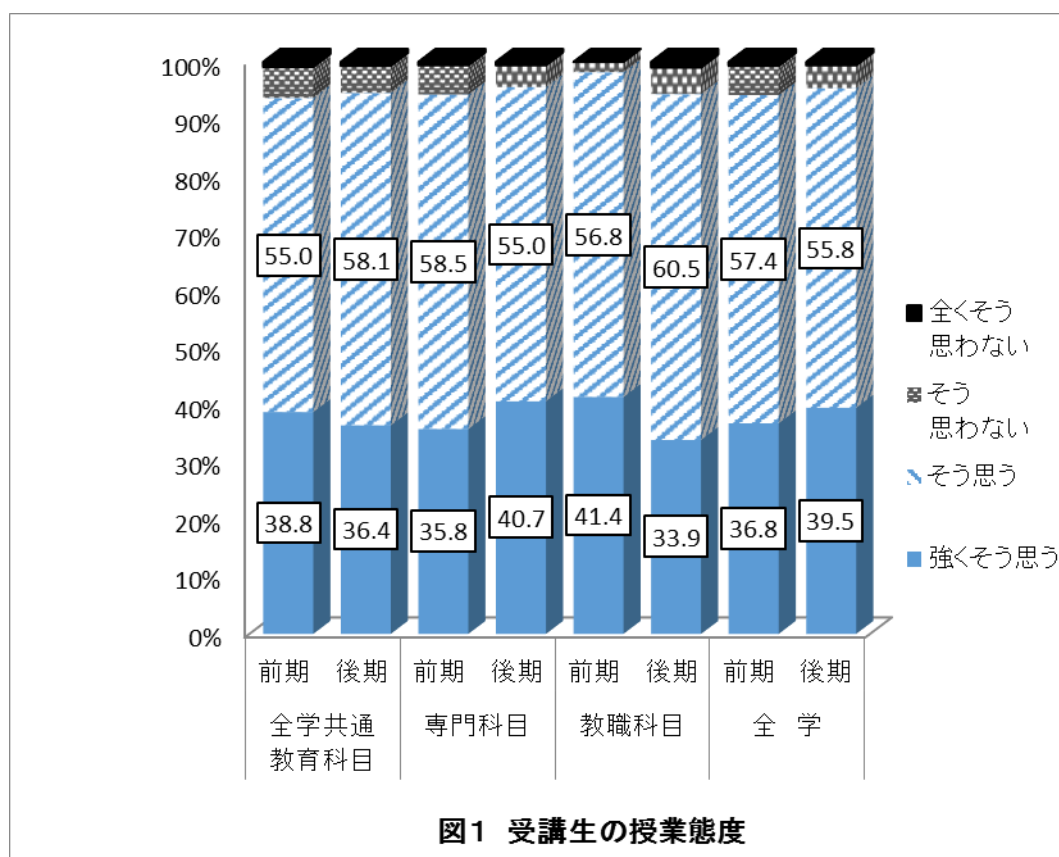


図1 受講生の授業態度

本学で教員免許の取得が可能な学部・学科は、人間文化学部国際文化学科（中学1種の英語・国語・社会教科並びに高校1種の英語・国語・地理歴史・公民教科）、同学部健康科学科（栄養教諭1種）、経営情報学部経営学科（高校1種の公民教科、）同学部経営情報学科（高校1種の情報教科）、生命環境学部（中学1種並びに高校1種の理科教科）である。教員免許という付加価値を希望する学生は毎年少なからずおり、卒業単位とは別の受講負担という点では学修意欲の指標の一つでもある。

次に表4-1, 4-2, 図2に受講生の主体的学修時間（問.「わたしがこの授業に関連して行った授業外学修（課題,準備,復習等）時間（1週間の平均）。）」の自己評価結果を示した。すなわち、平均して1週間にどのくらい授業外学修をしているかを、当該科目が2単位であれば、「4時間以上」、「2時間以上4時間未満」、「2時間未満」、「全くしていない」から1つを、当該科目が1単位であれば、「1時間以上」、「30分以上1時間未満」、「30分未満」、「全くしていない」から1つを選択させた。

表 4-1 受講生の主体的学修時間(1週間の平均)(前期)

科目群	4時間以上 または 1時間以上	2時間以上 4時間未満 または30分 以上 1時間未満	2時間未満 または 30分未満	全くして いない	全学(人)
全学共通教育科目	12.1%	31.2%	39.0%	17.7%	6,423
専門科目	16.3%	37.0%	37.0%	9.7%	14,410
教職科目	6.8%	26.9%	53.0%	13.2%	219
全学	14.9%	35.1%	37.7%	12.2%	21,052

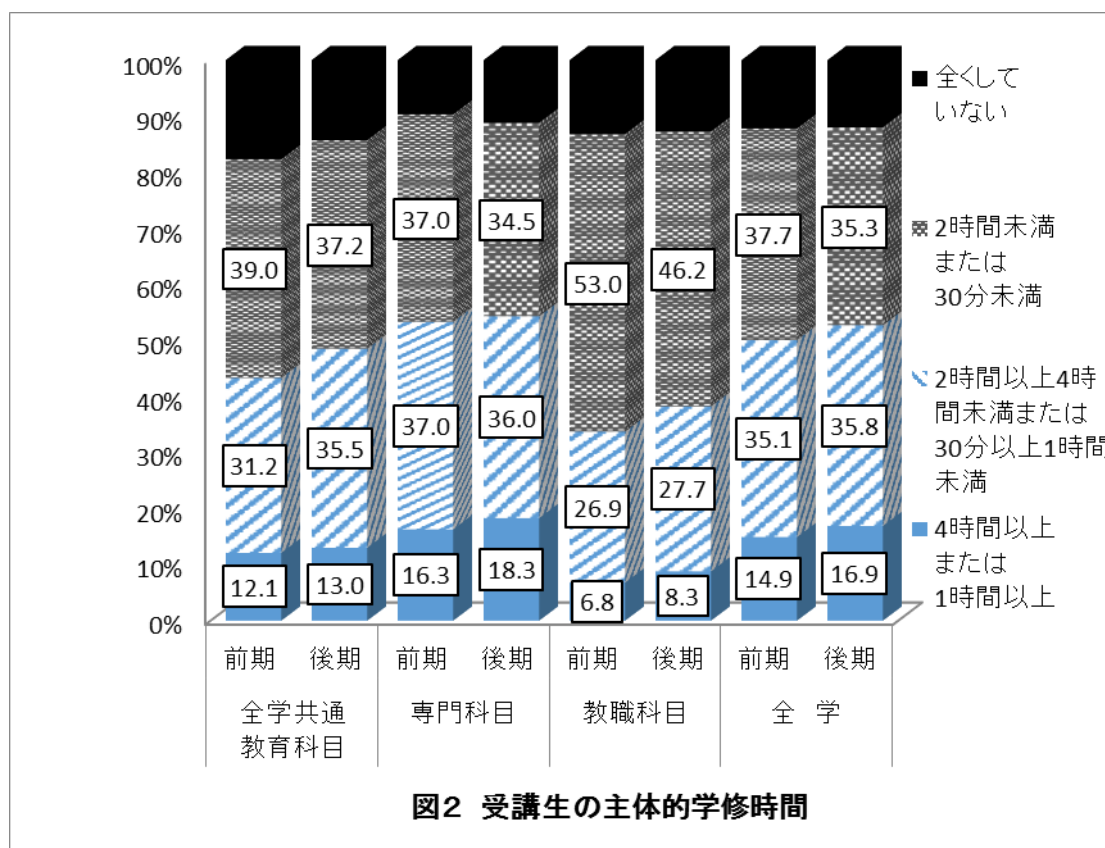
p<0.001

表 4-2 受講生の主体的学修時間(1週間の平均)(後期)

科目群	4時間以上 または 1時間以上	2時間以上 4時間未満 または30分 以上 1時間未満	2時間未満 または 30分未満	全くして いない	全学(人)
全学共通教育科目	13.0%	35.5%	37.2%	14.3%	4,825
専門科目	18.3%	36.0%	34.5%	11.2%	14,883
教職科目	8.3%	27.7%	46.2%	17.8%	303
全学	16.9%	35.8%	35.3%	12.0%	20,011

p<0.001

全学（全授業科目）で比較してみる。「4時間以上」と「2時間以上4時間未満」を加えると、前期は50.0%、後期は52.7%の学生は、授業外学修時間を確保し、それなりに主体的に取り組んでいるといえる。前期授業の修得を踏まえ、後期にさらに学修意欲を高めているものと理解できる。



全学共通教育科目（前期：43.3%，後期：48.5%）においても、専門科目（前期：53.3%，後期：54.4%）においても一定の学修時間は確保されている。ただし、教職科目（前期：33.8%，後期：36.0%）においては、全学共通教育科目や専門科目に比べて学修時間が少なくなっている。また、10%余りの学生は、十分な学修時間を確保できていない。（なお、四捨五入のため、図表中の数値の和と、本文中の数値が異なる場合がある。以下同様）学生による主体的学修姿勢が一気に培われるわけではない。教員の授業改善への不断の努力や教育力の向上を目指す組織的取組が成果に結びつくと考えられる。

以上、本学の学生の学修態度について概観した結果、僅かな質問項目からとはいえ、まじめに学業に取り組む学生の姿勢をうかがい知ることができた。ただし、主体的学修姿勢の涵養については、生活支援も含め、学修支援に関して一層検討する余地がある。

では、担当教員の授業に対する学生の評価はどうであろうか。以下では、全学共通教育科目、専門科目、教職科目について、それぞれの授業評価を概観する。

## (2) 全学共通教育科目の授業評価

全学共通教育科目は、従来のカリキュラムの充実と見直しを図り、平成 27 年度からは「初年次導入」、「基盤」、「キャリア」、「教養」、「広島と世界」の 5 つの科目群に再編され、全学的に開講されている。もっとも必要最低単位数は、学部・学科の特性から必ずしも一律ではない。全学共通教育科目の授業評価結果を設問項目ごとに、前・後期別に図 3 に示

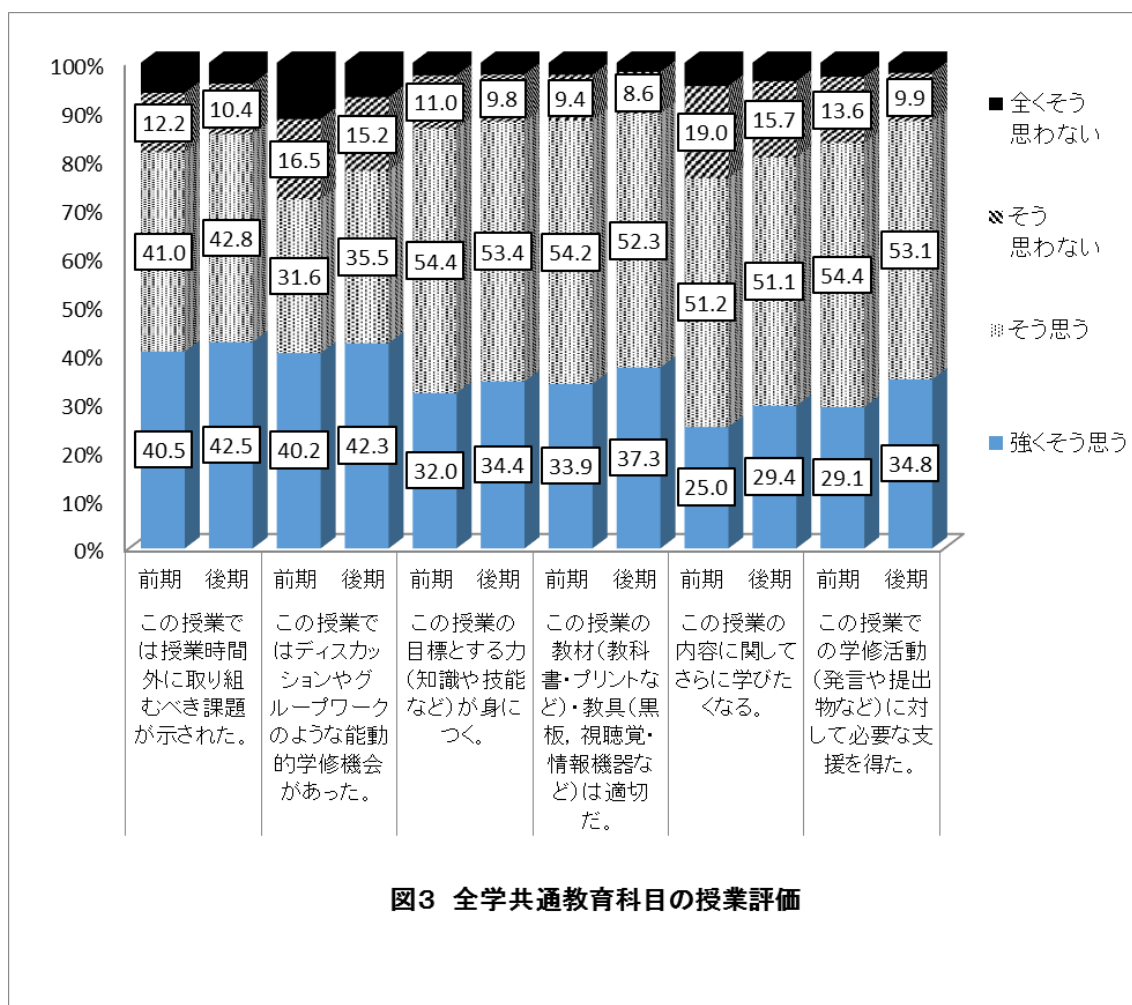


図3 全学共通教育科目の授業評価

した。問.「この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。」(課題提示)の肯定的回答比率(「強くそう思う」と「そう思う」の比率の和。以下同様。)は、前期は 81.6%、後期は 85.3%、問.「この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。」(能動的学修機会)は、前期は 71.9%、後期は 77.7%で、肯定的評価の割合をみるといずれも前期よりも後期の方が高くなっている。

また、問.「この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。」(目標達成)は、前期の 86.4%から後期の 87.7%と、問.「この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板、視聴覚・情報機器など)は適切だ。」(適切な情報提供)は前期の 88.1%から後期の 89.6%と、前期授業よりも後期授業の方が高い評価を得ている。教員がシラバスに基づ

き、教材作りに不断の努力を重ね、わかりやすい授業の実践に心がけている点の評価と受け止めることができる。さらに問.「この授業の内容に関してさらに学びたくなる。」(動機づけ)は、前期の 76.2%から後期の 80.5%へ、問.「この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支援を得た。」(教員の学習支援)は前期の 83.6%から後期の 87.9%と上昇しており、前期の授業評価を踏まえた上での教員の創意工夫が、後期の評価結果に現れたといえる。

おおむね 80%以上の肯定的評価を得ているということは、教員が学生のための配付資料や授業の進捗状況を考慮するのみならず、興味関心が湧くような工夫を凝らしていることがうかがえる。また、レポートなど提出物へのコメント記載やフィードバックする際のきめ細やかな教育支援を学生は素直に受け止めているようであった。専門科目に比べると全学共通教育科目は受講生が多く、運営上遠隔講義システムによる大講義室での授業もある。こうした教育環境に即した教材の提供・準備等、教員の教育的配慮が評価されたものと考えられる。もともと、否定的回答(「そう思わない」と「まったくそう思わない」の比率の和)をした受講生も、全ての項目において 1 割から 2 割程度居る。これらの受講生への教育支援が次の課題となる。

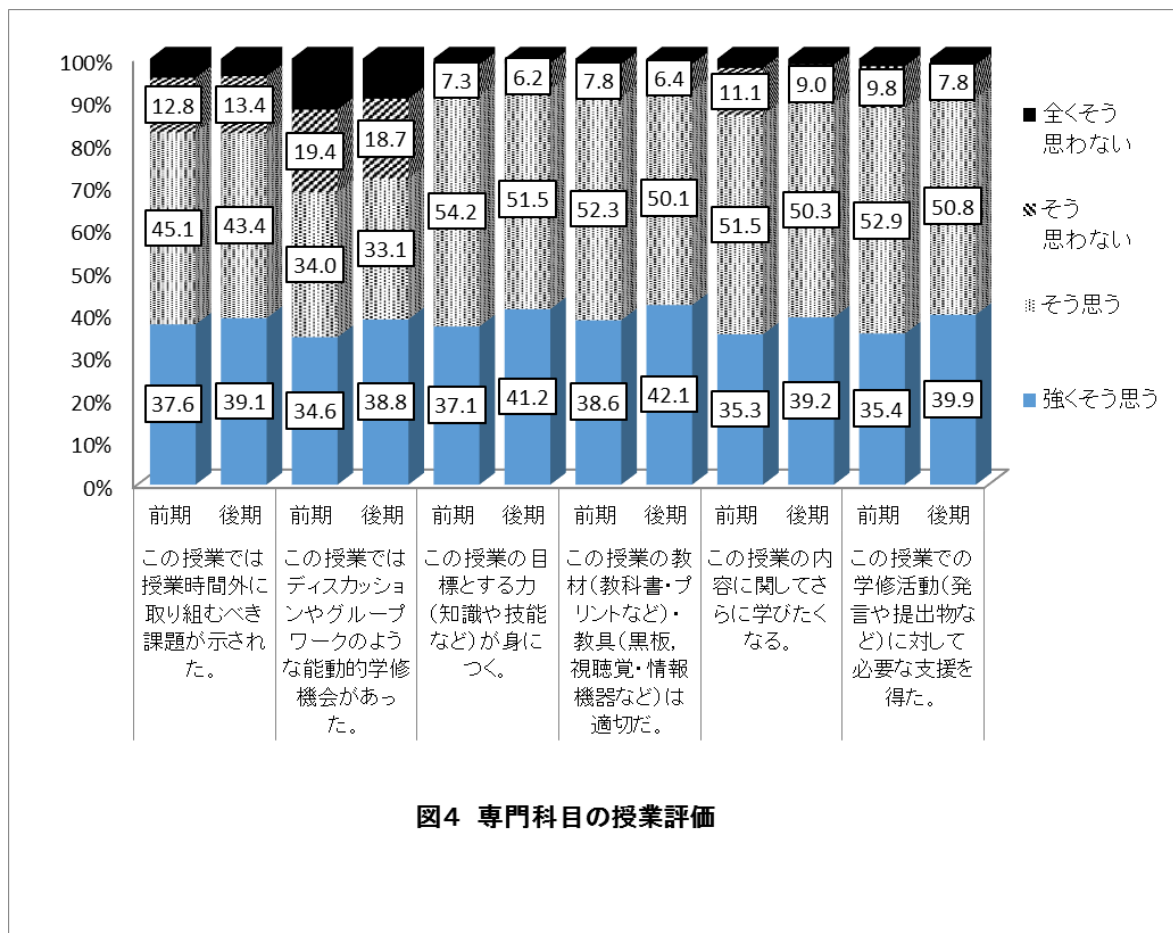
### (3) 専門科目の授業評価

図 4 に、専門科目の授業評価結果を設問項目ごとに前・後期別に示した。まず**課題提示**に関しては、「強くそう思う」が前期の 37.6%から後期は 39.1%へ、**能動的学修機会**に関しては、同じく「強くそう思う」が前期の 34.6%から後期は 38.8%へ、そして**目標達成**については前期の 37.1%から後期は 41.2%へ、**適切な情報提供**は前期の 38.6%から後期は 42.1%へ、**動機づけ**は前期の 35.3%から後期は 39.2%へ、**教員の学修支援**は前期の 35.4%から後期は 39.9%へといずれの項目も後期の結果が前期を上回っていることがわかる。全学共通教育よりもクラスサイズが小さく、より行き届いた教育方法と内容の結果が反映していることがわかる。例えば高等学校卒業後、初めて大学教育を受ける新生にとってはこれまでの学校教育の授業形態とは全く異なる未知の世界である。授業時間の長さ、専門的教科書の使用や配布資料、レポート課題、教員の授業方法等、一つひとつが学生には初体験なのである。教員が詳しい説明と適切な指示を与えることで、高等学校での学習を大学での学びにスムーズに移行できることになる。教員はこうした「手間」を省略するわけにはいかない。最近では高等学校での学修歴の多様化やカリキュラムの選択幅も拡大している。学生の反応を観察しつつ教員本位ではなく学生(学修者)本位の授業設計が求められており、教員の地道な授業改善の蓄積が受講生からの高い評価につながるとみてよからう。

大学の講義というものは、毎授業時間中に明解な答が出てくるといったものは極めて少なく、とりわけ人文学や社会科学の分野では、15 回分の授業の中で徐々に本質的理解が深まるような組み立てがなされている。あるいは問題の所在が明らかになるように設計され



ている。教員はそのプロセスを、一步一步時間をかけてまとめ上げているはずである。しかし、授業の初期の段階でつまづいた学生にとって、授業内容の理解や修得が困難になってしまう事態も起きるであろう。かたや専門性の高い授業を強く志向する学生にとっては、易しすぎる内容では興味を損ねてしまうことになりかねない。どのレベルの学生に授業内容を合わせるかは難しい。

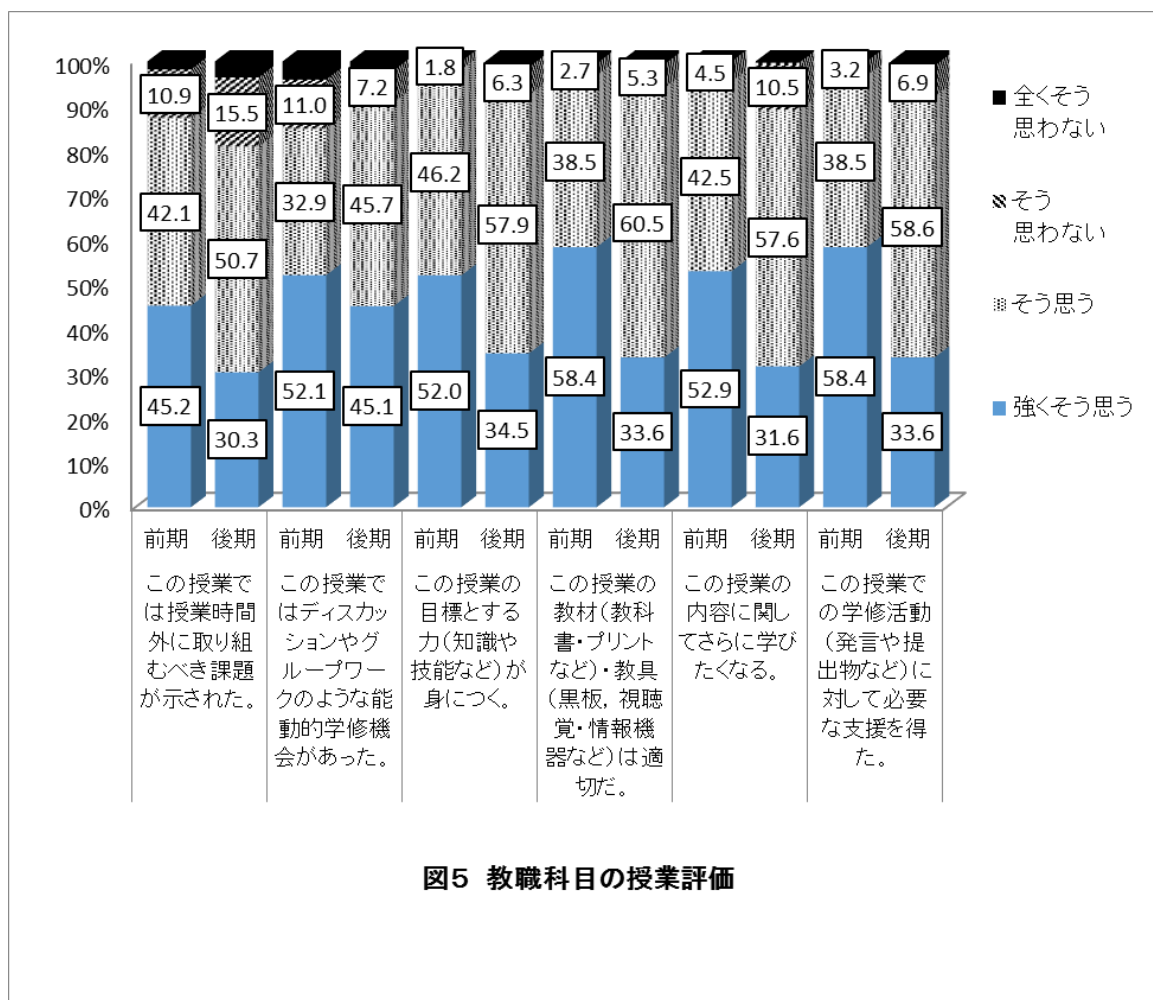


#### (4) 教職科目の授業評価

図5に、教職科目の授業評価結果を設問項目ごとに前・後期別に示した。教職科目においては、全学共通教育科目や専門科目と違い、肯定的評価が前期に比べて後期で高くなっているとは限らない。「強くそう思う」の比率はいずれの項目でも、前期に比べて後期で低くなっている。前期と後期では授業科目も担当者も違うため、単純に比較することは危険かもしれない。また、教職課程の履修は、実質的には1年次後期に始まり、後期授業が前期授業に先行する配置になっている影響もあると考えられる。しかし、前期授業評価後の各教員の授業改善が後期の授業に影響を及ぼすという点においては、担当教員による授業の改善にさらなる余地があるのである。

ただし、前後期とも、各設問項目の肯定的回答比率は8割から9割超と全学共通教育科

目や専門科目に比して低いものではない。教職科目は回答数が少なく、授業評価の回答がばらつきやすい。些細な数値にとらわれず、授業やその他の教職課程履修に対する学支支援の改善に取り組むことが望まれる。



### (5) 授業の総合的評価

さて、調査項目のうち、問.「総合的に判断して、この授業に満足している。」の項目は、授業の総合的評価とみなすことができる。そこで、総合的満足度について、全学共通教育科目、及び専門科目、教職科目別集計結果を前・後期別に表 5-1、5-2、図 6 に示した。全学でみると、「強くそう思う」と「そう思う」を加えた肯定的評価の割合は、前年度（前期：91.7%，後期：93.1%）よりやや低い、前期が 90.1%，後期が 92.2%であった。

本学がこれまで実施してきた当該調査の総合的満足度の評価を改めて時系列に比較すれば、平成 17 年度後期は 80.3%，平成 18 年度前期は 83.0%，平成 19 年度前期は 85.7%，同じく後期は 89.6%，平成 20 年度前期は 87.1%，後期 91.3%，平成 21 年前期は 89.8%，



表 5-1 満足度(前期)

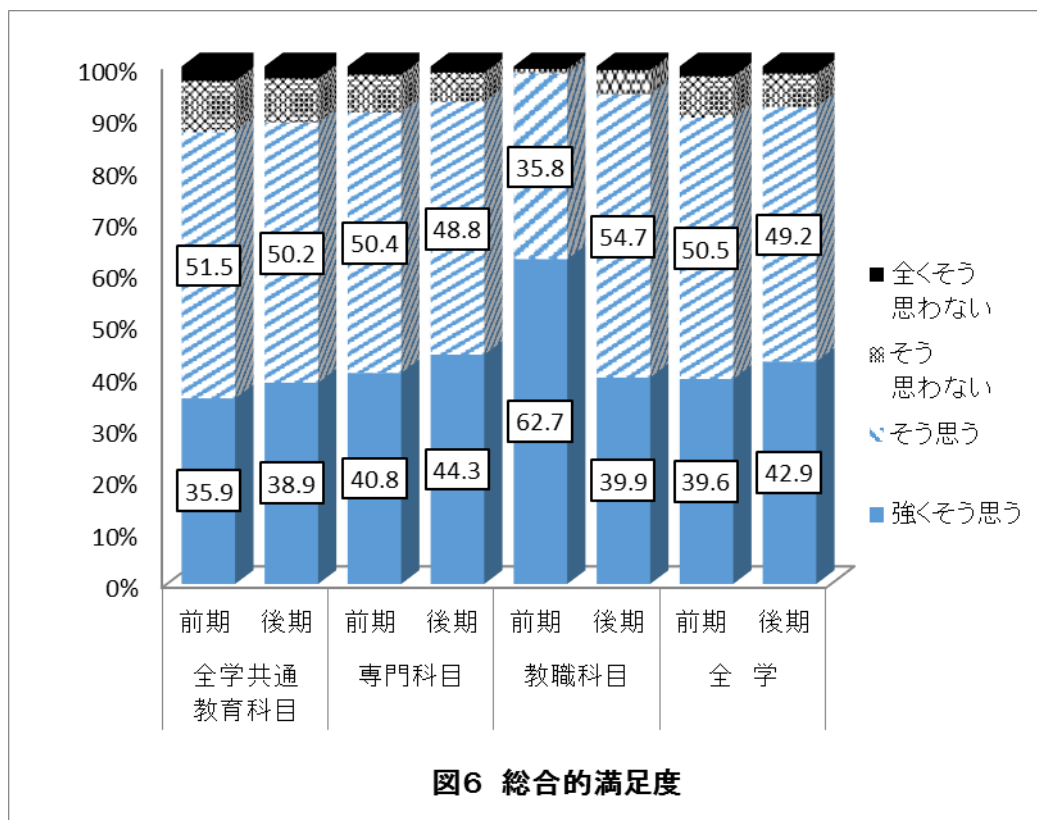
科目群	強く思う	そう思う	そう思わない	全く思わない	全学(人)
全学共通教育科目	35.9%	51.5%	9.9%	2.8%	5,974
専門科目	40.8%	50.4%	7.3%	1.6%	13,742
教職科目	62.7%	35.8%	0.9%	0.5%	212
全学	39.6%	50.5%	8.0%	1.9%	19,928

p<0.001

表 5-2 満足度(後期)

科目群	強く思う	そう思う	そう思わない	全く思わない	全学(人)
全学共通教育科目	38.9%	50.2%	8.6%	2.3%	4,565
専門科目	44.3%	48.8%	5.7%	1.2%	14,230
教職科目	39.9%	54.7%	4.7%	0.7%	296
全学	42.9%	49.2%	6.4%	1.4%	19,091

p<0.001



後期 91.6%, 平成 22 年前期は 90.2%, 後期 93.1%, 平成 23 年前期は 92.1%, 後期 93.5%, 平成 24 年前期は 91.5%, 後期 93.8%, 平成 25 年前期は 91.9%, 後期 94.1%, 平成 26 年度前期は 92.0%, 後期 94.5%, 平成 27 年度前期は 91.7%, 後期 93.1% と、近年は 90% を超える高い数値となっている。この数値をもってすれば、本学の教員は授業評価の結果に基づき、創意工夫や改善をしていると言えよう。しかしながら、満足度は様々な要素が複合的に組み合わさった結果に対する評価である。また、担当教員は諸事情により、やむなく授業の難易度や進捗度を変更している場合があるかもしれない。教育課程上の当該科目の位置づけ等も考慮すれば、満足度は必ずしも授業の質や完成度を反映しているわけではない。いずれにせよ、「分かりやすく興味深く、しかも知的な刺激を受ける」授業を、90 分の中にいかに構成・展開するかは、学生との真剣勝負であるといっても過言ではない。

(6) 項目間の相関<sup>1</sup>

各質問項目が、それぞれの項目間でどの程度の関連性があるのか、その関連の強さを、全学共通教育科目、専門教育科目、教職科目別に、表 6-1～表 8-2 に示した。表中の数値は、関連性の強弱を示す相関係数である。比較的強い相関を示していると言える係数値 (0.60 以上) に網掛けを施した。総合的満足度は全科目群で目標達成、適切な情報提供、動機づけ、教員の学修支援等の項目と高い相関のあることが確認された。他方、教員の学修支援は、目標達成、適切な情報提供、動機づけ等の項目と相関の高いことが判明した。

表 6-1 全学共通教育科目における項目間の相関<Pearson の相関係数> (前期)

網掛けは 0.60 以上の比較的強い相関(表 6-2～表 8-2 も同様)

項目	A-1	A-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-9
A-1	1.00								
A-2	.219**	1.00							
B-3	.292**	.468**	1.00						
B-4	.317**	.253**	.426**	1.00					
B-5	.459**	.181**	.341**	.373**	1.00				
B-6	.374**	.178**	.329**	.282**	.667**	1.00			
B-7	.418**	.171**	.263**	.289**	.637**	.583**	1.00		
B-8	.409**	.194**	.372**	.381**	.625**	.630**	.622**	1.00	
C-9	.477**	.129**	.270**	.310**	.669**	.625**	.675**	.665**	1.00

注)表中の\*\*は危険率 1%において、有意な関連性のあることを示している。以下の表も同様。

<sup>1</sup> a 及び b という項目があった場合、a に 1 (低い評価) を付けた人が、皆 b にも 1 (低い評価) を付ければ、相関は強くなる。二つの項目の数値が同じ傾向の動きをするほど相関は強くなる。全く同じ動きであれば、相関係数は 1.0 となり、真逆の動き (一方に 1 を付けた人はもう一方に 4 を付ける) をすれば、-1.0 となる。全くバラバラであれば、相関係数は 0.0 となる。

＜項目対応表＞(以下も同様)

A	1 わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。
	2 わたしがこの授業に関連して行った授業外学修(課題準備、復習等)時間。(1週間の平均)
B	3 この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。
	4 この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。
	5 この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。
	6 この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板、視聴覚・情報機器など)は適切だ。
	7 この授業の内容に関してさらに学びたいくなる。
	8 この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支援を得た。
C	9 総合的に判断して、この授業に満足している。

注)A: 学生自身の自己評価, B: 授業と教員について, C: 全般的評価

表 6-2 全学共通教育科目における項目間の相関＜Pearson の相関係数＞ (後期)

項目	A-1	A-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-9
A-1	1.00								
A-2	.282**	1.00							
B-3	.378**	.479**	1.00						
B-4	.336**	.288**	.438**	1.00					
B-5	.525**	.265**	.436**	.395**	1.00				
B-6	.493**	.249**	.437**	.359**	.725**	1.00			
B-7	.473**	.238**	.347**	.317**	.679**	.650**	1.00		
B-8	.482**	.247**	.447**	.391**	.666**	.716**	.665**	1.00	
C-9	.507**	.220**	.397**	.352**	.702**	.704**	.714**	.716**	1.00

表 7-1 専門科目における項目間の相関＜Pearson の相関係数＞ (前期)

項目	A-1	A-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-9
A-1	1.00								
A-2	.385**	1.00							
B-3	.424**	.507**	1.00						
B-4	.389**	.403**	.496**	1.00					
B-5	.551**	.327**	.451**	.478**	1.00				
B-6	.492**	.274**	.406**	.415**	.727**	1.00			
B-7	.529**	.320**	.402**	.454**	.722**	.686**	1.00		
B-8	.502**	.334**	.487**	.489**	.690**	.694**	.694**	1.00	
C-9	.553**	.287**	.412**	.438**	.751**	.730**	.760**	.732**	1.00

表 7-2 専門科目における項目間の相関<Pearson の相関係数> (後期)

項目	A-1	A-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-9
A-1	1.00								
A-2	.386**	1.00							
B-3	.444**	.525**	1.00						
B-4	.406**	.435**	.588**	1.00					
B-5	.559**	.349**	.502**	.511**	1.00				
B-6	.513**	.289**	.448**	.424**	.733**	1.00			
B-7	.550**	.330**	.443**	.449**	.712**	.682**	1.00		
B-8	.527**	.344**	.526**	.507**	.694**	.719**	.698**	1.00	
C-9	.564**	.306**	.482**	.462**	.735**	.736**	.745**	.749**	1.00

表 7-1 教職科目における項目間の相関<Pearson の相関係数> (前期)

項目	A-1	A-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-9
A-1	1.00								
A-2	.417**	1.00							
B-3	.466**	.473**	1.00						
B-4	.278**	.110	.257**	1.00					
B-5	.552**	.205**	.298**	.297**	1.00				
B-6	.385**	.189**	.298**	.274**	.622**	1.00			
B-7	.485**	.199**	.350**	.300**	.613**	.614**	1.00		
B-8	.431**	.239**	.370**	.318**	.633**	.640**	.653**	1.00	
C-9	.511**	.201**	.370**	.410**	.647**	.570**	.631**	.675**	1.00

表 8-2 教職科目における項目間の相関<Pearson の相関係数> (後期)

項目	A-1	A-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-9
A-1	1.00								
A-2	.319**	1.00							
B-3	.365**	.461**	1.00						
B-4	.262**	.285**	.471**	1.00					
B-5	.520**	.321**	.563**	.529**	1.00				
B-6	.405**	.218**	.341**	.437**	.618**	1.00			
B-7	.515**	.323**	.437**	.429**	.611**	.559**	1.00		
B-8	.481**	.243**	.491**	.476**	.658**	.634**	.608**	1.00	
C-9	.476**	.211**	.375**	.462**	.645**	.705**	.623**	.686**	1.00

### 3. 総 評

県立広島大学における平成 28 年度前期・後期開講科目を対象にした学生による授業評価結果から、本学における授業の実態を総括的に把握することができた。また、様々な改善を要する課題がいくつか明らかになった。以下に、それらを、若干の考察を加えて列挙する。

- ① 受講生のまじめで良好な授業態度が明らかにされた。このことは、本調査の回収率の高さからもうかがえた。しかしながら、主体的学修時間については、積極的に取り組んでいない学生もみうけられた。学修時間の確保がままならない状況の学生がいるとも考えられる。学生の生活支援を検討するとともに、授業方法・内容のさらなる工夫が求められる。
- ② 本調査からは、全体的におおむね良好な評価結果が得られたと言える。ここ数年同様、平成 28 年度も、全科目群ともすべての設問項目において、おおむね 80%以上の肯定的評価を得ることができた。90%以上の肯定的評価項目も確認された。
- ③ 自由記述からも本学教員は、授業に熱意をもって臨んでいると評価されている。具体的には、標準的授業時間数が確保され、講義で使用する教科書やプリントなどの補助教材、あるいは、実験の準備等、教員の授業に対する積極的な姿勢が評価されたと考えられる。
- ④ 教材・教具など、適切な情報提供の評価が高いということは、コースカタログやシラバスの内容に則った適切な授業が実施されたものとみなされるであろう。もともと本来授業は刺激と反応との相互作用によって創り上げられるものであるから、具体的目標の設定、軌道修正されたシラバス（改訂版）の再配布等、教員にはきめ細かな対応が求められる。
- ⑤ 提出したレポートや課題のフィードバックが十分になされていない授業科目がわずかながらある。厳格な成績評価を全学的な目標として掲げている以上、提出物に対する判定基準や個別の評価結果の伝達等は必要条件であろう。フィードバックは、授業における双方向性の確保の観点からも、必要不可欠である。
- ⑥ 授業によっては、学生の理解度を超えるような内容のものもある。教育と研究の統合や、高い目標設定は教員のねらいとするところであるが、ここでも授業の内容や構成に無理がないか、学生の到達度と教員の期待値に齟齬が生じていないか、冷静に判断していかなければならない。そのヒントは、授業公開並びに他の教員のシラバスや授業参観などから得ることもできよう。新任・昇任教員による授業公開を実践の好機と捉え、次年度はさらに全学的ピア・レビュー授業公開の促進に努めていきたい。
- ⑦ 学生が授業から知的刺激を受け、学修意欲がさらに増進しているという状況には改善が見られるものの、未だ改善の余地がある。たった一つの評価項目から判断できるも

のではないが、学修意欲の喚起や動機づけは授業方法論と深く関わりをもっているもので、これも教員相互の授業公開や参観等のFD活動により、良い刺激を受けて改善してゆく可能性はある。アクティブラーニングの導入など、授業形態の見直しも必要であろう。受講生の主体的学修時間は課題提示との相関が強い。提示された課題が多ければ、授業外学修時間が増えるのはもつともである。生涯学び続ける自律的なアクティブ・ラーナーとしては、授業で提示された課題だけでなく、自主的な学修を期待したい。

- ⑧ 授業に対する満足度は絶対的水準でみれば高いと言える。学科の特性を尊重しつつ、評価を下げないための不断の努力（授業改善）を怠るわけにはいかない。一方で、学生からの満足度が受講時には得られなくても、高学年次や卒業後に、大変有益であったと思ひ起こされる授業は数多く存在すると考えられる。卒業後、本来の意味を学生がようやく認識できたという事例は少なからずある。こうした授業を正當に評価する視点も失ってはならない。

近年、大学は、法人評価や認証評価など、大学全体として外部評価を避けては通れない状況にある。そのために授業評価を実施しなければならないという理屈も成り立つ。その意味で、「学生による授業評価」の実施は、業績測定とそれに基づく管理という目的に適いやすい。実際、大学組織改革の要である教員人事評価の問題点について、解決の方向性を検討した研究もみられる<sup>2</sup>。また、業績の測定・管理と教育改善は必ずしも互いを排する関係にあるわけではないとする議論もある<sup>3</sup>。

前述したように授業評価は、単に外部評価を受けるための資料としてではなく、授業改善の具体的な動きと即応させることこそ第一義である。そのためには、学期末ごとに集中的に実施されることによる学生の負担を考え、詳細な情報を得るために多様な項目を数多く設定することが果たして適切かどうかを考慮する必要がある。すなわち、授業改善に結びつく必要な情報をいかに的確で簡潔な内容（調査項目）で収集するかを検討していかなければならない。また、こうした調査を授業終了後に実施したのでは、当該授業の改善にすぐに結びつけることができない。できれば学期の中間で実施したいという意見については、中間アンケート実施促進週間を授業期間中に設け、用紙を準備し利用に供している。諸般の事情により集計結果を担当教員に委ねているため、定着にはしばらく時間を要するかもしれないが、具体的改善に結びつく特定項目や自由記述に限定し簡便な利用方法も考えられる。

授業の改善は学生との協同作業でもある。学生による授業評価の記入内容の信頼性を高めるためには、教員に学生を特定できないような措置を取りながらも、一方で記名式の調

<sup>2</sup> 佐々木恒夫・齊藤毅憲・渡辺峻編著 2006, 「大学教員の人事評価システム」中央経済社。

<sup>3</sup> 天野智水 2006, 「学生による授業評価を概観する」有本 章・北垣郁雄編著『大学力』ミネルヴァ書房, 282-287 頁。

査用紙を採用して学生に記載者責任の自覚や増進を促す工夫も考慮されるべきであろう。あるいは、各授業科目における達成度をコースカタログやシラバスに記載し、その結果を問うことで学生の自己評価としての機能を高めることも考えられる。

総合教育センターは、学生の主体的参加を促す方策を模索しながら、授業改善に資する情報を得るための調査を引き続き実施してゆきたいと考えている。

表9-1 全学共通教育科目における項目別の評価値（前期）

項 目		回答数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
<b>●あなた自身についての質問</b>						
1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。 (4：強くそう思う，3：そう思う，2：そう思わない，1：全くそう思わない)	6,422	1	4	3.32	0.61
2	わたしがこの授業に関連して行った授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均） (2単位科目：4時間以上...4 2時間以上4時間未満...3 2時間未満...2 全くしていない...1) (1単位科目：1時間以上...4 30分以上1時間未満...3 30分未満...2 全くしていない...1)	6,423	1	4	2.38	0.91
<b>●授業と教員についての質問（4：強くそう思う，3：そう思う，2：そう思わない，1：まったくそう思わない）</b>						
1	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。	6,438	1	4	3.16	0.87
2	この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。	6,377	1	4	3.00	1.02
3	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	6,423	1	4	3.16	0.71
4	この授業の教材（教科書・プリントなど）・教具（黒板、視聴覚・情報機器など）は適切だ。（判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。）	6,432	1	4	3.19	0.70
5	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	6,434	1	4	2.96	0.79
6	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得た。（判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。）	6,420	1	4	3.10	0.73
7	総合的に判断して、この授業に満足している。	5,974	1	4	3.20	0.73

注) 表中の平均値は、回答した選択肢、例えば「強くそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「そう思わない」を2点、「まったくそう思わない」を1点として算出した。数値が大きいほど肯定的に評価されている。以下の表も同様。

表9-2 全学共通教育科目における項目別の評価値 (後期)

項 目		回答数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
<b>●あなた自身についての質問</b>						
1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:全く そう思わない)	4,819	1	4	3.30	0.59
2	わたしがこの授業に関連して行った授業外学修(課題,準備,復 習等)時間。(1週間の平均) (2単位科目:4時間以上...4 2時間以上4時間未満...3 2時間未満... 2 全くしていない...1) (1単位科目:1時間以上...4 30分以上1時間未満...3 30分未満... 2 全くしていない...1)	4,825	1	4	2.47	0.89
<b>●授業と教員についての質問(4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:まったくそう思わない)</b>						
1	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。	4,843	1	4	3.23	0.80
2	この授業ではディスカッションやグループワークのような能動 的学修機会があった。	4,802	1	4	3.13	0.92
3	この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。	4,831	1	4	3.20	0.71
4	この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板,視聴 覚・情報機器など)は適切だ。(判断の理由を自由記述欄に具 体的に記入して下さい。)	4,842	1	4	3.25	0.69
5	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	4,846	1	4	3.06	0.77
6	この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支 援を得た。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下 さい。)	4,828	1	4	3.21	0.70
7	総合的に判断して,この授業に満足している。	4,565	1	4	3.26	0.71



表10-1 専門科目における項目別の評価値 (前期)

項目	回答数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	
<b>●あなた自身についての質問</b>						
1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:全くそう思わない)	14,413	1	4	3.30	0.59
2	わたしがこの授業に関連して行った授業外学修(課題,準備,復習等)時間。(1週間の平均) (2単位科目:4時間以上...4 2時間以上4時間未満...3 2時間未満...2 全くしていない...1) (1単位科目:1時間以上...4 30分以上1時間未満...3 30分未満...2 全くしていない...1)	14,410	1	4	2.60	0.87
<b>●授業と教員についての質問 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:まったくそう思わない)</b>						
1	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。	14,443	1	4	3.16	0.81
2	この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。	14,324	1	4	2.91	1.01
3	この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。	14,410	1	4	3.27	0.65
4	この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板,視聴覚・情報機器など)は適切だ。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	14,438	1	4	3.28	0.66
5	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	14,442	1	4	3.20	0.71
6	この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支援を得た。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	14,382	1	4	3.22	0.69
7	総合的に判断して,この授業に満足している。	13,742	1	4	3.30	0.67

表10-2 専門科目における項目別の評価値 (後期)

項目	回答数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	
<b>●あなた自身についての質問</b>						
1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:全くそう思わない)	14,888	1	4	3.36	0.58
2	わたしがこの授業に関連して行った授業外学修(課題,準備,復習等)時間。(1週間の平均) (2単位科目:4時間以上...4 2時間以上4時間未満...3 2時間未満...2 全くしていない...1) (1単位科目:1時間以上...4 30分以上1時間未満...3 30分未満...2 全くしていない...1)	14,883	1	4	2.62	0.91
<b>●授業と教員についての質問 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:まったくそう思わない)</b>						
1	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。	14,907	1	4	3.18	0.81
2	この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。	14,855	1	4	3.01	0.97
3	この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。	14,879	1	4	3.33	0.64
4	この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板,視聴覚・情報機器など)は適切だ。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	14,899	1	4	3.33	0.66
5	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	14,900	1	4	3.27	0.68
6	この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支援を得た。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	14,858	1	4	3.29	0.67
7	総合的に判断して,この授業に満足している。	14,230	1	4	3.36	0.64

表11-1 教職科目における項目別の評価値（前期）

項 目		回答数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
<b>●あなた自身についての質問</b>						
1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:全くそう思わない)	220	2	4	3.40	0.53
2	わたしがこの授業に関連して行った授業外学修(課題,準備,復習等)時間。(1週間の平均) (2単位科目:4時間以上...4 2時間以上4時間未満...3 2時間未満...2 全くしていない...1) (1単位科目:1時間以上...4 30分以上1時間未満...3 30分未満...2 全くしていない...1)	219	1	4	2.27	0.78
<b>●授業と教員についての質問(4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:まったくそう思わない)</b>						
1	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。	221	1	4	3.31	0.74
2	この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。	219	1	4	3.33	0.83
3	この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。	221	2	4	3.50	0.54
4	この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板,視聴覚・情報機器など)は適切だ。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	221	1	4	3.55	0.58
5	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	221	2	4	3.48	0.58
6	この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支援を得た。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	221	2	4	3.55	0.56
7	総合的に判断して,この授業に満足している。	212	1	4	3.61	0.54

表11-2 教職科目における項目別の評価値（後期）

項 目		回答数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
<b>●あなた自身についての質問</b>						
1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。 (4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:全くそう思わない)	304	1	4	3.27	0.59
2	わたしがこの授業に関連して行った授業外学修(課題,準備,復習等)時間。(1週間の平均) (2単位科目:4時間以上...4 2時間以上4時間未満...3 2時間未満...2 全くしていない...1) (1単位科目:1時間以上...4 30分以上1時間未満...3 30分未満...2 全くしていない...1)	303	1	4	2.26	0.85
<b>●授業と教員についての質問(4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:まったくそう思わない)</b>						
1	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示された。	304	1	4	3.08	0.77
2	この授業ではディスカッションやグループワークのような能動的学修機会があった。	304	1	4	3.34	0.70
3	この授業の目標とする力(知識や技能など)が身につく。	304	1	4	3.26	0.63
4	この授業の教材(教科書・プリントなど)・教具(黒板,視聴覚・情報機器など)は適切だ。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	304	1	4	3.27	0.59
5	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	304	1	4	3.20	0.63
6	この授業での学修活動(発言や提出物など)に対して必要な支援を得た。(判断の理由を自由記述欄に具体的に記入して下さい。)	304	1	4	3.25	0.62
7	総合的に判断して,この授業に満足している。	296	1	4	3.34	0.60

## おわりに

『平成 28 年度「学生による授業評価」報告書』をお届けします。この報告書には平成 28 年度の前期・後期に実施された「授業改善のためのアンケート」調査結果の全体集計、総評、アンケート結果を受けて作成された各授業担当者のコメント、学部および全学共通教育科目の分野別総括（教職科目を含む）が掲載されています。

各科目における教員コメントは、平成 25 年度より「昨年度の結果を踏まえた授業改善点」「履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点」「期末アンケート結果から見た今後の課題」の 3 項目に分けて記述しています。利用促進週間を設定した中間アンケートをはじめ、学生の実態を把握しようとする試みの状況や、授業が進行している最中に行われた改善の様子を浮き彫りにしたいとの思いからです。

特に「昨年度の結果を踏まえた授業改善点」の欄からは、多くの科目担当教員が様々な工夫を凝らし、学生の学修意欲の向上や授業外学修時間の確保に積極的に取り組んでいる様子をうかがい知ることができます。また、「履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点」の欄には、総合教育センターで用意した中間アンケートや各科目担当教員が独自に考えた学生の学修状況を把握するための工夫が報告されています。授業運営に関わるヒントが、この報告書から得られることを願ってやみません。

さて、この『「学生による授業評価」報告書』は平成 17 年度後期から始まり、実施から早くも 12 年が経過しました。その間、本学の授業改善あるいは教育改革の基礎資料となってきたわけですが、個々の授業の改善を促す目的だけではなく、全学的組織的な授業改善に少しでも繋がって行くよう、総合教育センターでは今後もアンケート内容・方法の不断の見直しに取り組んで行かねばならないと認識しています。さらに、収集した貴重なデータに基づき、現状把握・課題抽出をよりの確に行うことができるよう、データ分析力の向上を図っていく所存です。教職員の皆様におかれましては、引き続き忌憚のないご意見をお聞かせくださいますよう、お願い申し上げます。

本事業にかかわってくださった全ての方に心よりお礼を申し上げ、結びといたします。

平成 29 年 6 月

総合教育センター副センター長 小川 仁 士

**平成 28 年度**  
**県立広島大学総合教育センター**  
**高等教育推進部門会議委員**

( 高 等 教 育 推 進 部 門 長 )	丸山 浩明
( 人 間 文 化 学 部 委 員 長 )	柳川 順子
( 経 営 情 報 学 部 委 員 長 )	小川 仁士
( 生 命 環 境 学 部 委 員 長 )	五味 正志
( 保 健 福 祉 学 部 委 員 長 )	本岡 直子
( 全 学 共 通 教 育 部 門 長 )	本岡 直子
( 教 職 委 員 長 )	坪田 雄二
( 事 務 局 次 長 )	掲野 史也
( 本 部 教 学 総 括 課 長 )	千崎 道生
( 庄原キャンパス事務部教学課長)	星野 正嗣
( 三原キャンパス事務部教学課長)	山脇 明
( 総 合 教 育 セ ン タ ー 長 )	西本 寮子

**「学生による授業評価」報告書（平成 28 年度実施）**

---

2017（平成 29）年 6 月 発行

編 集・発 行：県立広島大学総合教育センター

お問 い 合 わ せ：県立広島大学総合教育センター

住 所：〒734-8558 広島市南区宇品東 1-1-71

電 話：082-251-9710（内線 1188）

F A X：082-251-9181

E - m a i l：sougou@pu-hiroshima.ac.jp

U R L：http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/general-education/

---